

暮らしの

# ミノリグサ

日常では触れることの少ない作業や体験を通し、現代に生きる私たちが忘れがちな、コトやモノの中にある豊かさを見つけ、コロボ鈴木がお伝えします。



小さな美術館「くにじ庵」  
丸子泉ヶ谷芸術祭実行委員／曾根邦治さん

くにじ庵：静岡市駿河区丸子泉ヶ谷 3315-9  
TEL / 054-257-1114

今回は静岡市の丸子泉ヶ谷で行われた「芸術祭」に参加してきました。小さな山里で芸術祭が行われるようになった背景を伺いながら、「暮らし」と「町」というものが、私達にとってどんな繋がりがあるのかを見つけていきたいと思います。



## 3 「芸術祭」

2008年から開催されている『山里のユニークな芸術祭』は、農家やお寺に作家の作品を展示する、まさにユニークな市民芸術祭。丸子泉ヶ谷に美術館を開く、版画家の曾根邦治さんが中心となり、今年も10月7日から6日間、この小さな山里が芸術の顔に染まった。8つの会場には、版画やガラス、木工など県内のあらゆる分野の44名の作家の作品が並び、多くの人たちで賑わった。

### 「自分の町」を知る、その意味。

「丸子泉ヶ谷って、温かくて、良いとこだなあ。」：里山の空気を吸い、のんびり民家の庭先に並ぶ作品を鑑賞していると、そんな心地良い気持ちになった。確かにここは良い所だけれど、なぜこの小さな里が芸術祭の舞台になったのだろうか？

そもそも芸術祭を行うきっかけは、里を思う気持ちだと邦治さんは言う。「町の人にもこういう風景を味わってもらいながら、芸術を散歩がてらに見てもらえたらなあ」という邦治さんの思いと、この里を知ってもらいたいという里の人々の思いが重なり、この芸術祭が開催された。これは、人と人、里と人との繋がりがなければ出来なかった芸術祭なのだ。

開催中は演奏会も行われ、小さな里に約5000人も人が訪れ、普段とは違う印象の芸術や里山の風景を皆自由に楽しんでいた。そのどの会場も、お客さんと触れ合う里の人たちの姿や心使いで、温かい空気に包まれていた。

あの気持ちは、きっと里の人から伝わってきたものなのだろう。そして、そんな里の姿に、自分の町を思うことの大切さや町と共にある暮らしの豊かさを教えられた気がする。自分の住んでいる町がどんな場所かでどんな人が暮らしているのかを知り、町の良さを見つけていくことで、きつと心から安らげる暮らしに繋がると感じた体験でした。

コロボ／鈴木久美子



お家のえん側が  
りっぱな展示スペースに!

民家に作家の作品を展示している会場の一つ。

